

しゆく さん ぼう

世界の寶架の

誕生
120年
記念特別絵画展



令和
4年

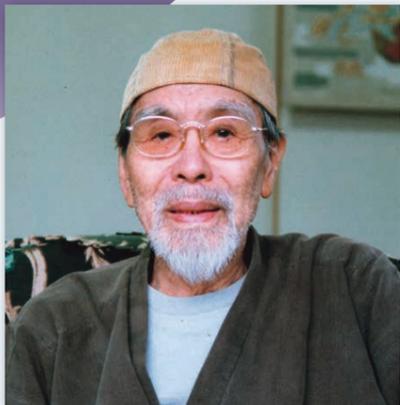
9/17 **土** ▶ 12/25 **日**

【開館時間】 平日 AM10:00~PM6:30 土・日・祝 AM10:00~PM5:00
【休館日】 月曜日(祝日の場合はその翌日)、祝日の翌日 【入場料】 無料
※会期中、一部作品の展示替えを行ないます



上「竹林七童」 下「臥雲室」

粛 粲 寶 の 世 界



粛 粲 寶 (1902-1994)

略 歴

明治35年 (1902)	新潟市西堀に生まれる 本名 水島太一郎
大正7年 (1918)	上京して働きながら大倉商業学校 (現：東京経済大学) に学ぶ
大正11年 (1922)	黒田清輝主宰の葵橋洋画研究所に入所
昭和4年 (1929)	帝展に初入選
昭和5年 (1930)	院展に初入選
昭和6年 (1931)	帝展入選 この頃より小林古径に師事
昭和8年 (1933)	奈良の古寺で寄食生活を送る
昭和12年 (1937)	帰京し作家活動を再開 以後画壇を離れ個展を中心に作品を発表
昭和23年 (1948)	この頃東京都杉並区久我山に居住する
昭和29年 (1954)	雅号を「粛粲寶」と定める
昭和40年 (1965)	38歳年下の中山正男氏と出会う
昭和47年 (1954)	パリのギャラリー・ベルネーム・ジュヌで個展
昭和50年 (1975)	「粛粲寶畫 花鳥十二ヶ月」毎日新聞社刊
昭和56年 (1981)	「粛粲寶石版画集 良寛さまの春・夏・秋・冬」石心堂刊
平成元年 (1989)	茨城県境町に転居 茨城県坂東市の萬蔵院で個展
平成6年 (1994)	逝去 (91歳)
平成28年 (2016)	N S G美術館 (新潟県新潟市) 開館
令和2年 (2020)	S-Gallery 粛粲寶美術館 (茨城県境町) 開館

粛粲寶(本名：水島太一郎)は、明治35年(1902)新潟市に生まれ、大正7年に上京して働きながら大倉商業学校(現・東京経済大学)に学びました。大正11年(1922)、洋画家黒田清輝の主宰する葵橋洋画研究所に入所し、帝展、院展での入賞を経て、同郷の日本画家小林古径に師事します。その後も入選を重ねる一方で、「古径の亜流(古径二世)」という美術界の評価に悩み、画業を離れ、奈良の古寺で寄食生活を送ります。4年後、作家活動を再開するために帰京した時には画風が一変、中国古典や仏法の教養に基づく文人画調の絵が独特な風情を醸し出し、見る者を豊かな気持ちへと誘う独自の作風が誕生しました。

昭和29年(1954)に定めた雅号「粛粲寶」には、「粲(さん：精米し光り輝く米)」を日々の「寶(たから)」として「粛々(しゅくしゅく)」と生きるという意味がこめられています。決して平穩ではなかった画家としての生活から、精力的に行った個展を通して、全国各地に愛好家を得るようになり、終生この雅号を用いることとなりました。

今展覧会では、晩年まで師を支え、「畏友」かつ「知友」として、ともに画業に邁進した唯一の弟子・中山正男氏(雅号：胡牀庵青空子)によるコレクションを中心に、天衣無縫、変幻自在の画法で切り拓いた粛粲寶ならではの画境をたどり、平成6年(1994)逝去するまでの91年の生涯を偲びます。独特の画風に加え、画賛や遊印に垣間見える機知に富んだメッセージも併せてお楽しみいただければ幸いです。

水島太一郎から粛粲寶へ

水島太一郎は、画家として順調に実績を重ねながらも、画壇での評価に悩み、一度は画業を離れた。奈良の古寺での4年に及ぶ寄食生活を経てその画風は一変し、文人画調の独特な作風へと進化する。水島太一、蒂行風(ていぎょうふう)などの雅号を使用し、昭和29年(1954)、「粛粲寶」と定めた。



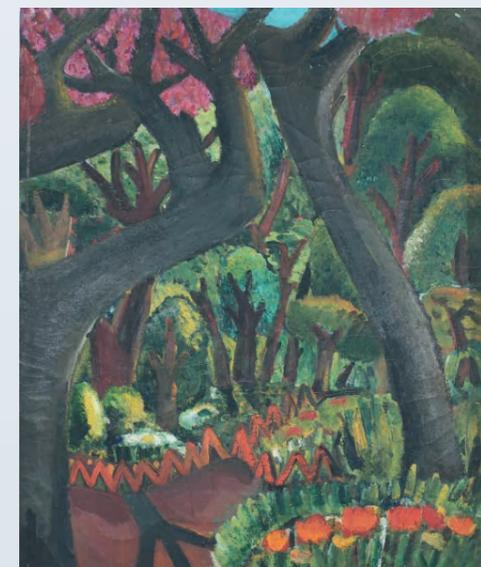
自画像



長女誕生



初夏閑日



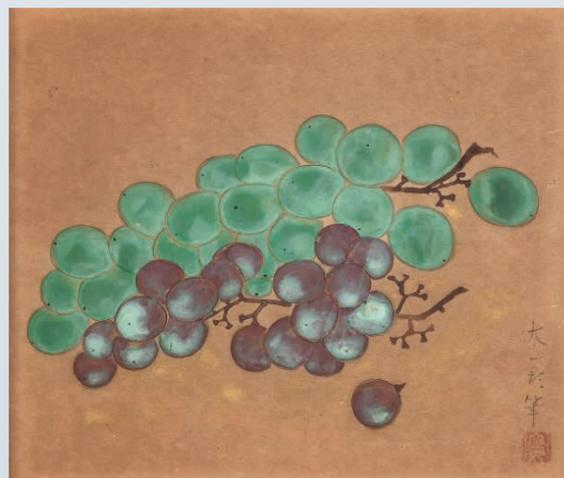
湯檜曾風景



仙客嘉童



嘉實競甘



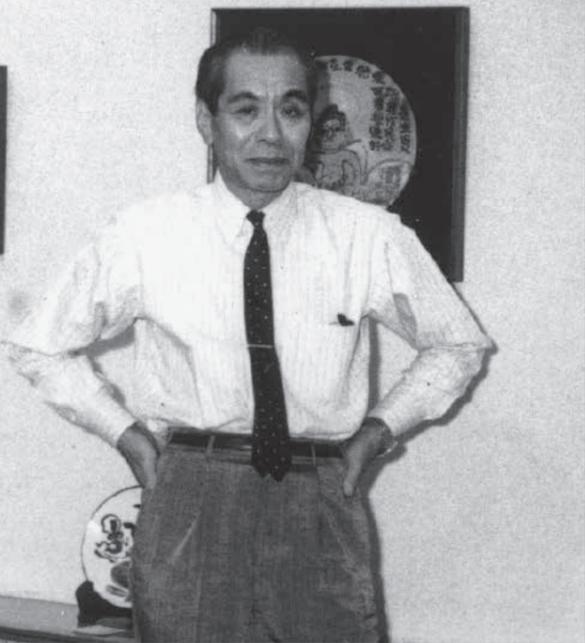
ぶどう図



十二単衣(杜若)

人気画家・肅榮寶

肅榮寶は、全国各地で個展を開催、多くの愛好家を得て、人気画家となった。三越百貨店では30回以上の個展を開催している。活躍の一方で、終生どの団体・会派にも属すことを拒み「孤高の画家」とも呼ばれた。その作品は、企業のノベルティなどにも採用され、多彩な画業を展開した。



資生堂ギャラリー個展会場の肅榮寶（昭和39年）



瑞寶



閑遊華頂上



十指有長短（三越個展案内状原画）



富貴清客



晴燕

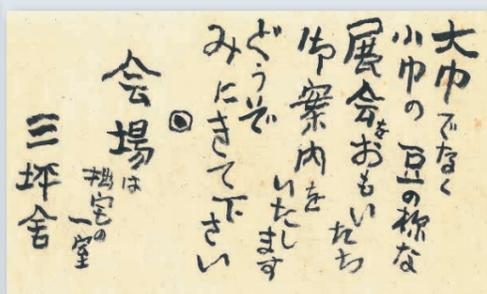
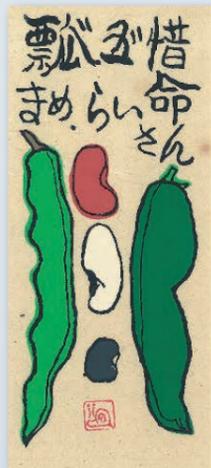
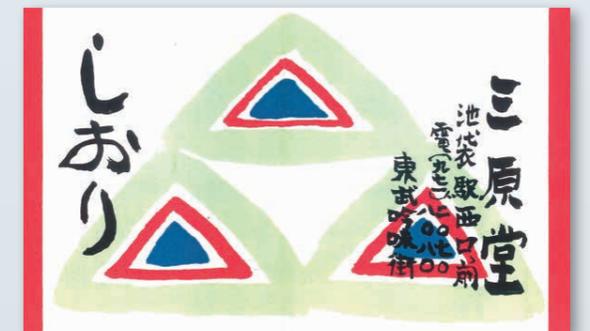


布袋（三越展出品）



村むすめ（三越展出品）

肅榮寶のデザインを使用した広告、印刷物

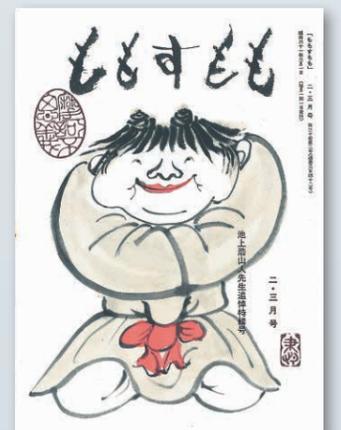


86歳当時、東京久我山の自宅アトリエで開催した展覧会の案内状（部分）。年齢から展覧会名を「八六第一展」とした。



息子で陶芸家の掌一行と松山三越を会場に開催した親子展のチラシ

- [左上] 三木のり平公演舞台パンフレット
- [右上] 和菓子店しおり（池袋 三原堂）
- [左下] カレンダー図案（日本橋 テーラーホソノ）
- [右下] 俳句誌「ももすもも」表紙（俳人 池上浩山人主宰）



孤高の画人、茨城を終の棲家に

人気画家として60年近い画業一筋の人生を送ってきた肅燊實。平成元年（1989）には、互いに「知友」と認め合った中山正男氏を頼り、東京から茨城県境町に転居した。平成6年に91歳で逝去するまで、当地域で創作活動、個展を行ない、地元文化人らと交流、数多くの作品を残した。



肅燊實から中山氏への手紙に添えられていた挿絵。「今後をよろしく頼みます」という意味があるという。



上古霊椿大花図



竹林七童



不動明王



観世音菩薩



喜風三笑



神鹿三頭図



観世音



阿弥陀三尊図（般若心経 石彫朱文印彫作 胡牀庵青空子）



晩年の肅燊實と中山正男氏（茨城県境町にて）



「青空子」の雅号とともに中山氏に贈った作品。時間をかけてうま味を増す干し柿が描かれている。



十六羅漢図（般若心経 石彫朱文印彫作 胡牀庵青空子）



山中有三樂



六地藏



寄樂祝根



樂其生保其壽



梟（ガラス絵）



富貴花（牡丹）スケッチ



蟪（ヒキガエル）スケッチ

協力者（敬称略・順不同）

中山正男（胡牀庵青空子） 鹿久保喜一 初見貞夫 初見 孝
中川祐聖 慈徳山萬蔵院 境 町

ご来館に際しては、新型コロナウイルス感染拡大防止にご協力をお願い致します。また、状況によっては休館等となる場合がありますので、最新情報はホームページをご覧ください。

会期中、一部作品の展示替えを行いません

